

基礎日本語

3 目語

角川小辞典

8-2

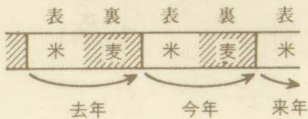
森田良行



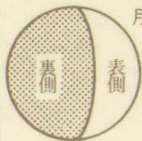
おもて (表)

おもては人の顔に相当する。ては、立方体や直

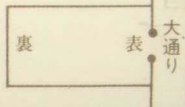
方体のおもてはどこなのだろうか。サイコロも月もどの面も同じ価値的指標を備えているからである。おもては人々の目にさらされている部分といえる。米・麦の表作と裏作の関係は、本来の事柄と臨時の事柄の差から生じる。表玄関、表参道なども、正式の入口のある側、大事な客を迎える側をいう。



意味②



意味③



意味④

どこが表?



意味①

本書は、基礎的な和語の、それも特に意味と文法とのかわり合いが意味内容に影響を与える問題語を中心に、それとの関連で類義語や対義語、動詞の自他形式などを取り上げて解説した「意味・用法の記述書」である。文法的観点から語義の実態をとらえることを旨としたもので、いわゆる世間一般の「類義語辞典」とは異なる点である。

角川書店



角川小辞典——8-2

基礎日本語 3

森田良行



角川書店



基礎日本語3——意味と使い方

著者・森田良行

発行者・角川春樹

印刷者・大室辰雄

製本者・宮田四郎

発行所・角川書店

東京都板橋区前野町二の二三の八

東京都文京区後楽一―三―七

東京都千代田区富士見二―一三―三・郵便番号102

振替口座東京三一―九五二〇八

電話03 (八五五―) (辞書編集部)
(238238) (八五二―) (営業部)

初版・昭和五十九年十月三十日発行

装丁・代田 燹

製版印刷・大成舎 製本・宮田製本

落丁本、乱丁本はお取替えいたしません

0581-060820-0946(0)

©Printed in Japan

著者紹介

もりた よしゆき
森田良行 昭和五年一月二日東京都

杉並区で出生。高校時代より文学と言葉に興味を持ち、早稲田大学第一文学部に入學。つづいて大学院修士課程に進み、国語学を専攻。現代語の文法・表現・意味・文章を研究。高校の国語教育に携わって後、早稲田大学語学教育研究所で留学生への日本語教育に従事。日本人学生に対しても国語学・日本文法などの講義を担当。現代日本語を文法論・表現論・語彙論・意味論の面から研究している。昭和五十三年度インドネシア国立バジャラン大学に、五十七年度、中国の北京大学にそれぞれ一年間客員教授として赴任し、院生に日本語学を講じた。現在、早稲田大学教授・津田塾大学講師。

まえがき

『基礎日本語』の補遺編として第二巻が世に出たのは昭和五十五年六月のことであるから、その後四年の歳月が経過している。第一巻はその二年半前の五十二年十月に出ているから、『基礎日本語』は誕生して六歳半の齡を重ねたことになる。人間でいえば学齡期に達したわけである。その間、著者は再度にわたる長期の海外生活を経験し、また短期の海外出張を数度おこなって多くの外国人日本語研究者や教師・学習者と接する機会を得たが、『基礎日本語』が海外において意外と好評を得、日本語の学習や研究に重宝しているとの声をしばしば耳にした。一方、国内においても国語教育・日本語教育の教育現場だけでなく、大学や大学院における国語研究・意味研究などの際にも利用され、また放送・出版・翻訳などの分野でも参考図書として活用されていると聞く。

ただ、なにぶんにも収録語数がさほど多くないことから、最近一、二年は、第三巻はいつごろ出ることかといった質問をしばしば耳にするようになった。これは『基礎日本語』に対する期待感の現れと共に、収載語彙の補充を希望する率直な声とも受け止められ、著者としては何としても重い腰を上げねばならぬ時期にさしかかったと判断せざるを得なかった。幸い出版社側も『基礎日本語』の続刊には乗り気で、前向きな姿勢を示してくれた。

昭和五十八年一月、著者は一年間の海外生活を終えて帰国するや、さっそく第三巻作成のための語彙選択の作業に取りかかった。過去の一、二巻は用言・副詞を中心にいちおう全品詞にわたって和語

の基礎的な語彙の中から見出し語・関連語を選んではいるが、なにぶんにも名詞は数知れず多く、動詞も他品詞に比して語数が多い。限られた紙数で、しかも語義・用法解説を詳しくすれば、収載できる語数にはおのずから限度が生じる。そのため収録語の分布は、品詞別に見るとかなり粗密にばらつきと片寄りが見られるのであるが、本書は一般国語辞典と異なつて、“ことばの戸籍簿”的な性格を持たないから、いわゆる基礎語彙表を目指す必要は全くない。むしろ語彙量の多寡にとらわれず、意味・用法面でぜひとも解説を必要とするような問題語のみにしぼつて、それらについて突っ込んだ分析を心置きなく行ふ、これが『基礎日本語』に対する読者の要求と、そう考えていいであらう。とは言え、日本語教育での初級語彙ぐらゐは触れてあることが望ましいし、どんな語でも基礎語と思われる和語なら何らかの点で問題となる事柄を含んでいるものである。しかし、具体的な物を指す名詞、たとえば「机」や「手紙」は、特に解説を施さねばならぬほどの語ではないから、この種の名詞は割愛しても支障はない。一方、「家」や「頭」は具体的な“モノ名詞”ではあるが、派生義や比喩の意味を持つから「机」などに比べて遥かに問題点が多い。具体的な事物や現象を表す名詞、それに単義の動詞は捨てても多義語はできるだけ拾うのが好ましいわけである。また、形容詞・形容動詞・副詞の類は抽象的な状態性や程度性を表す語群であるから、たとえ単義の語であっても初級語彙はできるだけ収録して解説を加えておくことが望ましい。このような判断から今回の第三巻では、名詞・動詞はたとえ初級基本語であっても意味の面でさして問題がないと思われれるものは拾わず、派生義の多いものや類義語との関係で問題となりそうなものを積極的に取り上げた。形容詞・形容動詞・副詞は一、二巻に漏れた語を積極的に補つたが、前回同様、見出し語はできるだけ和語から選ぶとの基本

方針に従った。ただし、「便利」「有名」「立派」など極めて基本的な重要語は漢語ではあるが例外的に取り上げた。その他、感動詞・助動詞・接頭語・接尾語の類も若干補った。なお、見出しとしては立てないが、関連語や解説中で触れた語はかなりの数にのぼり、漢語もまた多い。

さて、こうして一・二・三巻に収録された語を通して見ると、圧倒的に單純語の和語が多い。複合語は、複合成分としてしばしば用いられるものを接尾語として収録し、複合形式の形ではいちいち見出しとして立てないとの当初の方針に従ったからである。(これは巻末索引でも同様で、索引見出しとしても立てることをしていない。そのため索引から検索できる語の数は、実際に本書で扱った語の数より少なくなっている。)また、漢語・外来語および擬音語・擬態語は、本書の属する「小辞典シリーズ」にそれぞれ他の著者による一巻が予定されていたため意識的に取り上げることをしなかった。これらの語は、語構成のあり方も造語方式も、一般和語とは異なる。それに、いずれも意味領域が狭く、文法上もさして問題のない語群であるし、第一、取り上げるとなると収録すべき語数が爆発的に増えてしまうこともあって、当初の方針どおり考慮項目からははずすことにしたのである。この間の事情を巻一・巻二においては断らなかつたため、諸誌に寄せられた書評では、本書を単なる類義語辞典であるかと錯覚し、当然触れるべき漢語が取り上げられていないとの批評もちょうだいた。が、本書はあくまで基礎的な和語の、それも特に意味と文法とのかわり合いが意味内容に影響を与える問題語を中心に、それとの関連で類義語や対義語、動詞の自他形式などを取り上げ解説した「意味・用法の記述書」である。文法的観点から語義の実態をとらえることを目ざしたもので、いわゆる世間一般の類義語辞典とは異なる。当然、類義語との対応関係を持たない語でも、必要と思われ

るものはどしどし取り上げ、解説を加えた。本書の記述を通して意味と文法とのからみ合いの姿がわかりただければ著者望外の幸せである。大方のご批判を仰ぎたい。

最後に、本書は先の一、二巻と合わせて全体で一つのまとまりを成すものと考え、全く同じ形式で執筆した。したがって、解説中の参照項目も第一巻・第二巻で扱った語は適宜参照できるよう矢印(↓)で示し、(1)(2)と明示しておいた。また、巻末索引にも三巻分の語を合わせ収録し、必要に応じてそれらの項目が検索できるよう配慮し、①②のマークを付しておいた。本書と合わせて同時に利用されることを希望する。前巻同様、本書についても大方のご叱正を期待するものである。

昭和五十九年九月

著者

基礎
日本語
3

品詞一覽

名	名詞
代名	代名詞
自動	自動詞
他動	他動詞
形容	形容詞
形動	形容動詞
副	副詞
連体	連体詞
感動	感動詞
接統	接統詞
補助	補助動詞
補形	補助形容詞
助動	助動詞
助	助詞
接頭	接頭語
接尾	接尾語
連語	連語
語素	造語要素

あ

ああ 感 ↓↓はい

あいまい 「曖昧」形動↓↓はつきり

ーあう 「合う、会う」接尾(動詞型活用)

他の動詞に付いて、複数の事物・事柄・人間などがその行為や作用・状態の実現によって相互間に何らかの関係が生ずることを表す。そのような関係にある状態が名詞的接尾語、「ーあい」である。「ーあう」によって示される関係のあり方には、先行動詞の意味によって違いがみられる。↓あう(1)、ーあわせる(1)

分析1 「あう」は、もともと無関係であったA・B二者が、状況の変化によって互いが関係を持つ状態となること。目的意志を持って行った結果そうなる場合と、たまたまそのような状態にある場合と、二種類ある。複合動詞「くあう」にも、意志的行為と非意志的状況と、どちらの場合もみられる。

(1)二つの事柄が対応関係にあることを表す

「この柄がらは私には似合わない」「釣り合わざるは不縁のもと」「自分の学力に見合った学校を選ぶのが合格のコツです」「あまりにも不利な、ひき合わない話だ」状態性の「くあう」である。

(2)複数の事物が接近・接触・重層状態にあることを表す
物と物との位置関係「重なりあう山並み」「木々の枝葉が茂りあい、被さりあい、絡みあって、あたりは鬱おぼそうと暗い」「ぶつかり合うほどに軒を接して建ち並ぶ兎小屋」「彼女と隣りあって座る」
事柄同士の関係「オートレースなんて成功と危険とが隣り合っている恐ろしいスポーツだ」「会議の時間とち合う」の例もみられる。これがさらに状態性から動作性へと進めば次の(3)となる。

(3)異なる者同士の関係のありさまを表す

「どうも話が噛み合わない」「両横綱ごご五分に渡り合う大相撲」「意見が折り合わない」「両社は販路拡張をめざして張り合っている」「互いに知り合った仲」「憎み合っていたら、いつまで経っても事は解決しない」「反目しあっている両国の間」

さらに、他者に対し積極的に関係を持っていく行為にも用いる。

「人とつき合う法」「あんな奴に取り合うな」「負けてくれるよう店の主人に掛け合ってみよう」「気安く掛け合うんじゃないよ」

(4) 一方が他方と新たに関係を持つことを表す

「よき師にめぐり合えて幸せだ」「四つ角で先生と出会った」「駅で落ちあう」「手術に立ちあう」

両者の邂逅がさらに両者の接触・衝突へと進展する。

「肌を触れ合うほどの仲」「小さな隕石同士がぶつかり合って雪だるま式にふくれ上がる」

(5) 意志的行為として互いに交わす行為を表す

「肩を叩き合って互いに相手の健闘を讃え合う」「母娘抱き合って、しばしの涙に暮れるのであった」「グロブで撃ち合う格闘技」「蹴り合い、投げ合い、なぐり合い、スタミナの限りを尽くして戦うプロレスラー」「一時間もすれば、すっかりうちとけ合って仲良しになった」「蟻ありと蟻ありうなづきあひて何か事ありげに走る西へ東へ」(橋曙覧)

「皆で技を競い合う」や「夜更けまで飲みあい歌いあい、どんちゃか騒ぎを繰り広げる」のように、大勢いっしょにある行為を行う場合と、「交互に問題を出し合ってテストに備える」のように、両者で一つの行為を展開させていく場合とがみられる。同じ「出し合う」でも、

「皆で金を出し合って銭別せんべつとする」と言えば共同の行為となるように、文脈に支配される面が強い。「代わり合って荷物を持つ」のような交互動作もあれば、「両力士互いに睨み合にらみあって、さて時間一杯」「親同士認め合った仲」のような、時を同じくして双方が同じ行為をなす場合もある。

(5)の意志的相互動作は「ーこ／ーっこ」で置き換える場合が多い。ただし「鬼ごっこ」「にらめっこ」のように「ーこ」は幼児語・児童語であるから、「道の譲りっこをする」「通知票の見せっこ」「子供の取りっこ」のように言うと、児童語的となる。「道の譲り合い」「子供の取り合い」の方が大人らしい日本語となる。

(6)多数の人や事物が同じ状態や行為・作用をなしている場面のさまを表す

「バスはかなり込み合っていた」「一同黙り合って重苦しい空気が会場にみなぎっていた」「地獄の底では大ぜいの罪人どものものがき合あっている姿が見えるのでした」「年来の友が一堂いっどうに集あい、旧交を温め合う」

分析②「ーあう」は「A・B二者が一つの状況のもとに一括される状態で互いに事をなす」という意味を先行動詞に添える。それが場合によって共同動作になったり、交互動作となったりするわけである。したがって、A・

Bどちらか一方方向からの一方的な挑みが可能な行為、たとえば「戦う」や「けんかする」「相談する」などは、交互に「A→B/A←B」としかけ合うことが可能なため、双方が共に行為を交わすという相互性を賦与する意味で「いあう」が付きうる。また、二者間の行為には、AかBの一方のみの一人相撲、片思い的行為もある。たとえば「愛する」や「憎む」がそれで、AからBへの一方的行為に対して双方が共に同じ行為を交えるという相互性「A↔B」を与える意味で、これも「いあう」が付く。このようにA・B両者の主体的相互行為性を動詞に添える働きなのである。だから「抱く」は、人間以外のもので抱く対象となるゆえ「人間同士が互いに」という意味で「いあう」が付きうる。人形を抱くこととは、きても、人形と抱きあうことはできない。それに対し、「結婚する」や「試合する」のように、人間同士の主体的な相互行為の語には、もはや「いあう」を添えることはできない。互いに行為しあわない結婚や試合など存在しない以上、「いあう」を添える意味が無くなるからである。

関連語

いあい

名詞形として「折り合いがつかない」「狐きつねと狸たぬきの化かし合い」「押し合い、へしあい」「競り合いに強い」「知り

合い同士」「村の寄り合い」「殺し合い」「なぐり合いになる」「助け合い運動」「国土の奪い合い」「腹の探り合い」「点の取り合い」「お見合い」と例は多い。その意味は「いあう」と軌を一にする。

言いいい、いがみ、請け、打ち、押し、折り、掛かり、かわり、競り、助け、噛み、斬り、食い、組み、知り、競り、助け、立ち、つかみ、付き、釣り、連れ、出、出来、取っ組み、取り、なぐり、慣れ、にらみ、似、話し、張り、引き、ふれ、見、向かい、めぐり、もみ、譲り、寄り、渡り

あき 「空き、明き」名↓から

あし 「足、脚」名

本来は動物が体を支えたり移動したりするために備えている、胴から突き出した部分のことであるが、その機能の特色を帯びた事物にも比喩的に用いられるようになった。人間の場合、ものをつかまえたり、持ったり、作業をする役割を担うものとして「手」が分化しているが、一般の動物に対してはすべて「足」とよんでいる。ただし、四本足のものに対しては、頭に近い方の一対を「前

足」尻に近い方の一对を「後ろ足」と言い、人間になぞらえて、前足を「手」とよぶこともある。↓

分析① 足をその機能から、**①**胴を支える役割と、**②**移動の手段とに分けることができる。足の意味も、この二つの機能に応じて二分される。

① 本体を支えるものの意から

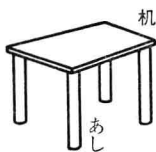
(1) 人間の足を、もっぱら体を支えるものという面のみからとらえるいい方がある。「二本足で立つ」「足が地に着いていない」(着実に欠けている)「足をふんばる」など。足を、身を置く場所に立つものとしてとらえれば「足を洗う」(身を引く。悪業から離れる)のような慣用句を生む。鳥や昆虫が身を支えて立つための肢に形が似ているところから航空機の前輪も「あし」とよぶ。「飛行機が脚を出して着陸態勢に入る」

(2) 動物の足と同じように、本体から突き出ている地面もしくは床に接し、本体を倒れないように支えているもの(ふつう、三本以上)を総称する。

机・椅子・ストープ・鼎・香炉・テレビアンテナ・

着陸船……の脚

「山田の中の本足のかし」「四脚の門」カメラの三脚も「あし」である。「三脚の足を伸ばす」。本体を支えなくとも、足状に本体から長く突き出ている固い棒状の



ものを「あし」と見立てることのできる。「かんざしの足」「コンパスの足」など。長く突き出ているため、布団などから出てしまふところを比喩的に、ある範囲内に納まらない状態に「足が出る」「足を出す」(赤字になる)とも言う。

(3) 本体を支えるという働きから種々の熟語を生む。

「足場が悪い」「足もとが危い」「足もとの明るいうちに早く帰ろう」

などの「足場」「足もと」がそれである。空間的に支えるのではなく、経済的・精神的な支えや抛りどころにも「足もとを見て安く買ったたく」のような使い方がみられる。

(4) 本体を支える部分は、物の下の方の部分であるから、特に突き出ているなくとも、下部を「足」とよぶことがある。「書類審査で足切りをする」「船の足」(吃水線から下の部分)「山の足」(ふもと)など(「山足」は別語)。山は末広がりに開いているところから、これを着物の

裾すそにたとえて「山の裾」「山裾」とも言うが（西洋では「スカート」）、これは山の麓ふもとの広がった部分をさし、「裾野」のような語もあるように、かなり傾斜のゆるい部分。山の足はもっと急傾斜であってもかまわない。

(5)体を宙で支えるためには、両足を広げて足先を踏み掛けて立たねばならぬところから、左右の足が掛かっている範囲という意味で比喩的に「足掛け」の語を用いる。

期間の初めと終わりに足が掛かっているという意味から初めと終わりの端数期間をそれぞれ「一」と計算した数え方。「東京に越してからもう足かけ五年になる」

㊦移動の手段となるもの意から

(1)足を使って体を移動させる行為は「歩く」である。足の歩く行為や状態をとらえて「足どり（歩調）も軽い」「犯人の足どりを追う」「足並みをそろえる」「足音を忍ばせる」「駆け足」「速足はや」「千鳥足」「べた足」などの語が用いられる。前進するための足の運動なら、歩かなくとも「ばた足」（泳ぐときの足の動き）と使う。さらに、足は出掛けるための手段と考えて、

あし
「何度も足を運ぶ」「足が達者だ」「足繁く通う」「足が遠のく」「客（の）足が途絶える」「その足で郵便局に回る」「ついでにデパートまで足を延ばす」「足に任せてあちこち歩く」「足で稼ぐ記者生活」「脅迫電話から犯人の

足がつく」「足まめに何度もご機嫌伺いに行く」「手まめ足まめ」「一足違いで会えなかった」「一足お先に失礼いたします」

などの言い方を生む。↓あるく（1）

(2)足の「移動の手段」という面のみが強調されると、ほかの乗物を利用して出掛けることにも「足」が用いられるようになる。

「電車ストで通勤の足を奪われる」「税関で足止めを食う」「足代がかかる」

さらに、移動そのものを表すようになり、物事の動きや変化にまで「足」が使われる。

「急行列車が足早に過ぎて行く」「船足、雲足、日脚、日の足」「生物は足が早い」（腐りやすい）「季節の足音」(3)移動の手段たまたまである足を、行為行動を進める原動力と見立てて、

「子供が足手まといで仕事がかどらない」「手枷、足枷」「人の手足となって働く」「スランプに陥って仕事は足踏み状態だ」「足ならしに軽い仕事から始めよう」「知人のコネを足がかり（手がかり）に売り込み合戦を展開する」「しっかり足固めをして準備にとりかかる」「大臣の発言は勇み足だった」

(4)さらに単に移動するものというだけの意味で「おあし」

(金銭)のような語も生む。この場合は必ず「お」を付けて用いる。

分析② 人間の足は、股から先の部分全体をさす場合と、足首から先だけをさす場合とがある。前者は、もも、膝、脛をも含めた全体。「足が棒になる」(足がひどく疲れる)の足は前者。「足の裏」の足は後者。この二つの区別は「手」の二分法と対応する。

あたま [頭] 名

人や動物の首から上の部分の名称であるが、顔との対比で、顔を除いた上面から後ろにかけての部分をさすこともある。頭は脳を納めた部分であるから、特に脳の働きについて言う場合もあり、また、体の最上部にあるところから、上部または先端部分をさすようにもなった。

分析 ①首から上の部分をさす。

(1)「(競泳で)頭一つ出ている」「頭をかかえて考え込む」「申し訳ありませんでしたと頭を下げる」「頭隠して尻隠さず」「奴には頭が上がらない」(対等の立場に立てない)「頭の下がる立派な行い」「お地蔵様の頭が欠けている」「頭に水がめを載せて運ぶ」のように、首から上の身体部分をさすが、

(2)頭は体の最上部もしくは最先端にあって、ややふくら



こけしの頭



釘の頭



み突き出た格好をしているところから、比喩的にそのような形態部分をさして頭と言うことがある。「実るほど頭を下げる稲穂かな」「釘の頭」「春になって、つくしが頭を出した」

「頭打ち」(限界に達して、もうそれ以上伸展の見込みのない状態)も、上端部を押さえられるという意味で同じ発想である。山や雲などの上部も比喩的に頭とよぶ。「入道雲がむくむくと頭をもた

げた」「頭を雲の上に出し、四方の山を見おろして、かみなりさまを下にきく、ふじは日本一の山」(文部省唱歌「ふじの山」)

(3)「物の上部」の意味がさらに進んで、最上層に位置する位や人も頭とみるようになる。「おかしら／かしら」である。

「人の頭に立つ」「頭株の人」「先輩を頭に据える」「役付きの多い頭でっかちの人事」

(4)事物の上下の位置関係から序列関係へと発展すれば、事柄の初めの部分が頭となる。「賃金の頭をはねる」(う

わまえをはねる)他人へ渡す前に、初めに利益の一部を取ってしまう行為を、金の最初の部分(頭)を切り取る^{と見立てたものである}。「頭金」も同様の発想である。

(5)事の初めの段階を頭と見立てるところから「冒頭」の部分^{が頭となる}。「最初」である。

「文章は頭から読んで行くものだ」「時候のあいさつを文章の頭に置く/出す」「頭から信用しようとしな^い」「頭ごなしに叱りつける」

手紙の「頭語」、「接頭語」「竜頭蛇尾」などの「頭」も同じく「初めの部分」を意味している。

「クジラは頭^の先から尻尾の先まで利用できる」「頭^のてっぺんから足の先まで、めかし込む」のように、胴体の先端である頭は、物事の先端、それもコースや順序の最初の部分を表すのである。

㊦顔の上・後ろの部分^{をさす}

一方、頭を顔との対比からとらえる見方もある。「危険ですから、バスの窓から顔を出さないでください」と言うとき、頭部全体が出ているにもかかわらず「顔を出さないで」と言う。頭部のうち目や鼻のある部分としてとらえられる面を「顔」とよび、残りの部分(人間で言えば髪の生えている上面と背面)を特に限定して「頭」とよぶわけである。

「頭をなでる」「頭^のてっぺんに毛が三本」「失敗して頭^をかく」「頭^がつるつ禿^だ」「はげ頭、やかん頭、白毛頭、ごま塩頭、坊主頭」

頭には髪があるところから「頭を丸める」(髪をそって僧になる)のように、特に頭髪をさして言うこともある。「頭を七三に分ける」

㊦脳の状態や働きにも「頭」を用いる

頭は頭部の外側部分をいうだけでなく、内側にも用いる。「頭が痛む」「頭^がずきずきする」「頭痛」など、内部の肉体的自覚症状として用いられる。頭は脳を納めるところでもあるから、

「頭^がすっきりした」「頭^が重い」「頭^がはっきりしない」「頭^が冴えている」

など、脳の状態をさすだけでなく、脳の働きや、働き具合にも用いられる。↓ここ

「よく頭^が働く」「頭^で考える」「頭^{の中}に入れておく」
頭を……働かせる、痛める、悩ませる、使う

頭^が……鋭い、鈍い、いい、悪い、古い、固い、柔らかい、変だ、おかしい、冴えている

頭^に……来る、浮かぶ、入れる、ある、ない(考慮対象としていない)

㊦頭は人間を代表するもの^{と考えるから}、人間ひとりひ

とりを数える意識のとき「頭」を用いる。複合語として用いる。

「頭数を当たる」「収益を頭割にする」「一人頭一百万の割当て」

【関連語】 かお

頭が脳の働きを表すのに対し、顔は感情や思考が表情として現れるところである。そこから、その人の様子を「顔」で表す。

変な、いやな、うれしそう、気のすず

まぬ、知らぬ、うかぬ、大きな、険しい

そ知らぬ、何食わぬ、われ関せぬ

「得意顔、したり顔、わけ知り顔、物知り顔、寝ぼけ

顔」「顔色をうかがう」「顔つき」

また、顔は人間を他の人物と区別するところ、その人を代表する部分でもあるから、社会生活における人間関係を保つところとしても用いられる。

「顔が売れている」「顔に泥を塗る」

顔が……広い、きく、立つ、つぶれる

顔を……立てる、つぶす、繋ぐ、売る

「顔役、顔繋ぎ、顔見せ、顔合わせ、顔出し、顔なじみ、顔見知り」「顔向けできない」

さらに広く「人間」を代表することにもなる。

「顔がそろったら開会する」「一流どころの顔をそろえろ」「顔ぶれがそろろ」

あたり 「辺り」 名

「当たる」からきた語。「遠縁に当たる人」「西の方角に当たる」のように、その対象のおよそのところとして漠然と示す気持ちがあり、そこから名詞形「当たりをつける」つまり「見当をつける」といった推量的気分も生まれる。「辺り」も、話題とする事物を、いつ、どこ、だれ、とはっきり断定せず、およそのところとして漠然と示すことばである。名詞として独立して用いるほか、時・所・人をさす名詞に付けて接尾語的にも用いられる。⇨あたる(1)

【分析】 (1) 視点を基準点とする場合

「辺り」はその事物の該当するところを、ある広がりを持った範囲として示す語である。「点」で示さず「線」や「面」で示す言い方とたどえてもいい。したがって、「あたり」と言う以上、発想の基となる基準点が存在する。「ススキの穂が出て、あたりはもう秋の気配である」「あたり一面の焼け野が原」は、話し手の視点の位置が基準点となる。「ここ」と限定せず、「ここ」を取り巻くある広がりを持った範囲を漠然とさしているわけである。